

【報告4】

「日本型教育の発展に向けた 日本人学校と現地校との協力体制の モデル化」

○天野 幸輔（名古屋学院大学）

鈴木 純一郎（多摩市立貝取小学校）

原 圭吾（岐阜県可児郡御嵩町立御嵩小学校）

プロジェクトDの目的と活動の実際

①カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

→Tokkatsu（学級活動(2)）の公開授業および意見交換会：令和5年9月18日、学級活動(1)の模擬学級会を含む交流活動：令和5年12月28日

②Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。

→令和5年EJS児童がCJS運動会に参加

③一連のプロセスから、日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する。

→令和6年12月22日にCJSを訪問し、校長と教頭にインタビューを実施。

※EJS55校の中でCJSとの直接交流を行うことが認められているのはIndustrial Zone校のみである。



目的①：カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

**Tokkatsu（学級活動(2)）の公開授業および
意見交換会：令和5年9月18日**

**授業参観の様子（公開授業による授業研究
は日本で生まれた実践的な研修手法）**



目的①：カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

学級活動(1)の模擬学級会を含む交流活動：
令和5年12月28日

日本の教育課程である特別活動を介しての
模擬授業体験と研修



特別活動が、EJS教員とCJS教員の共同授業研究や研修を可能にした(1)

現地校と日本人学校の新しい交流のモデル化を切り拓く上で、特別活動ゆえの利点とは？

- 「領域」であり、担任教師、教科担任教師、経験年数など関係なく、全職員で取り組む必要がある点。
→全校体制が整えやすい（地域性に関する学びの場にもなる）。学級経営上の問題の共有の機会提供。学年の協力体制の構築（比較的規模の大きな日本人学校）。
- 行事や委員会活動、生徒会活動などに関しては、国内であっても、その年ごとに学校が抱える問題が異なり、「昨年度と同様」が通用しない部分が存在する。それゆえに「その年ごとに創造していく部分が不可欠」である点を、日本人教師が、身をもって理解している。
→派遣国の政情、国内問題の影響、また日本の国政から直接影響を受けらる点で、そもそもが変更を余儀なくされることが多いので、学級経営などは保守的になりがち。変化を求めない職員も一定数存在する。

特別活動が、EJS教員とCJS教員の共同授業研究や研修を可能にした(2)

- これまでの「現地校の見学を代表例とする教員の交流活動」は現地理解、現地の教育事情の視察にとどまる。
- より「教師ゆえの、教師にしかできない交流活動」としての提案
- では「日本は教える側、エジプトは教えられる側」という関係性で終始してよいのだろうか？

→①「特別活動は日本の教育課程なのだから、こうあるべき」という姿勢では、文化の侵略になりかねない。どのように取り入れ、どのようなものに創り上げていくか、はあくまでエジプト側が決めていくべきこと ②日本型の負の側面にも留意し、エジプトからの逆輸入としてとらえるなかで、日本が学ぶべきことも見えてくるのではないか

→これらの点をよく理解して、日本人学校と現地校でのよりよい交流活動のモデル化を図る必要がある

日本人学校教師と現地校教師が共に研究授業等を行えば、
即それをもって「共同授業研究」と言えるのだろうか？

1 日本人学校教師と現地校教師の対等な関係

特別活動を知っている者と教えてもらう者、などといった前提があっては、研究授業で問題点を率直に語るができなくなってしまう可能性がある。逆もまた然り、「海外で」となると卑屈になっている面はないだろうか。

2 「日本の教育課程の意義を理解する場」という観点

日本で誕生した教育課程ゆえに、当たり前になってしまい、その価値に気付かなくなっている面がある。全く違う文化・価値観の教師・学校で実践されることでしか気づけない部分がある。「日本人である私」との出会いにある可能性も。

3 帰国後の実践や教員キャリアの問題点・方向性をつかむ機会

モデル化につきものである「画餅」を脱する主体的な参加・活動あってこそ。授業研究の意義や楽しさを国内ではなく、日本人学校で知ることにも。まさにキャリア発達の間。技術面もさることながら、精神面を低く見すぎるのも残念。熱心な現地校教師の姿。

※EJSの教員にTOKKATSUの指導を行う職はTOKKATSU Officerという専門職である。

目的②Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。

- すでにCJSの運動会へEJS児童の参加が実現（令和5，6年度）
- 日本の現場では「入場から退場までが演技」として指導。整然とした入退場、真剣な競技を保護者に教育成果として発表。一般的には、数日前にリハーサルを行って、細部まで調整を行う。
- EJS児童を前日のリハーサルに呼んで、徒競走、綱引き、玉入れの動作を確認。予想通り、全く動きを理解しておらず、入退場から競争の方法と順番等の指導を行った。
- EJSの教師には、運動会の特別活動としての位置づけを伝えるだけでなく、「現場教師の学校行事を万全なものにしていく精神性」といったものも伝わったのではないか。

目的②Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。

【特別活動を介する交流（一部）】

- CJS縦割りの特別活動「なかよしランチ」にEJS Industrial Zone校の校長、教員、エジプト教育省特活プロジェクト担当を招待。
- CJS中学生職場体験で生徒1名がEJSを訪問。EJS海外協力隊員にインタビュー実施。
- CJSジャパNDERにEJS Industrial Zone校の児童を招待。折り紙やカルタなど日本文化の紹介や体験を通じた交流を実施。
- CJSとEJS双方の入学式・卒業式に校長・教頭・教師が参加。

→**CJSとEJSの保護者交流が実現すれば、日本の教育や特別活動の意義がより深く伝わる。CJSへのEJS保護者招待から始めるとよい？**

目的③一連のプロセスから、日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する

【モデル化の実現に向け、CJS校長・教頭へのインタビューの実施】

- 福島慎哉校長（R3派遣）、森下理香教頭（R4派遣）
- インタビュー（部分）①：まずは日本人学校での実践が、保護者に理解を得て、いわば地に足がついたものにならないければ、交流以前の問題となってしまう。そのことに改めて気づかされた語りがあった。インタビュー前日に保護者からの声があったとのことであった。
- インタビュー（部分）②：エジプトが特別活動を取り入れたことで、CJSとEJSとの間に、共通の教育課程が生まれた。このことは他の国々の日本人学校と例えば現地校との交流と比較して、大きな相違点と言えるであろう。では単に共通の教育課程が存在すれば、日本人学校は現地の学校に影響を与えられるのであろうか。

インタビュー（部分）①

特別活動とEJS交流のことを資料とともに3分作らせて、特別活動を説明した。保護者はこれまでも見てきているので教科はわかる。例えば学級会の様子とか、何のためにそれをするのか、特活のねらいを説明した。…**実は行事多いですねっていう声もあるが**、この行事というのはこのねらいで、入学式からこういろんなのが、こうあると。…この一年間通して計画的にやっていますと示した。具体的に「なかよしの日」をどういうふうにやってるか、「なかよしタイム」はこんなふうに、「なかよしクラブ」はこんなふうにやっていると説明した。…感想を書いてももらったが、「**非常にこの説明で今、学校が取り組んでいることがよくわかった**」と。保護者には学校評価を行っていたが、**今までは、「目的はわからなくて見ているので評価できない」とも言われてきた**。今回はこういうことを通して**学校評価も書きやすくなる**ということである。個々の活動については保護者にどう映ったか、どう捉えたかというのを学校運営の方にも反映させていきたいと考える。

→**まずはCSJ保護者に特別活動をよく理解していただかなければ、交流は成り立たない。ねらいや活動内容などをていねいに説明することで、学校評価もしやすくなり、教育活動への参画意識も高まる。日本への示唆でもある。**

インタビュー（部分）②

特活の導入は、**エジプトの教員のスタンス発想が転換される機会であった**と感じている。日本もそうであったが、エジプトでは先生は「教えるもの」である。先生が言った通りに進めていく。**2年見ているだけでも卒業式の様子も校長先生が全部仕切ってやっていたのが、今年は子どもたちにやらせていた。**全てではないが、子どもたちは主体になってやっているところがあり、先生方の発想の転換に対して、日本の教育が大きな影響を与えたのではないか。そのところでの**スーパーバイザーの先生はご苦勞をなさっている。その点がすごく大事**ではないか、と私は思っている。

→やはり**管理職の目には、単にエジプト人教師の努力だけでなく、日本人のスーパーバイザーの存在が映っていたようである。**立場を置き換えれば容易に想像がつくが、日本側が別の国の教育課程を**トップダウン**で取り入れることになったら、かなりの**困難と混乱**が起きることだろう。EJSに通い、通訳を介すとはいえ言葉の壁を越えながら、異国に日本の教育課程を伝えるだけでなく、**授業として成立するところまで指導している**のである。

交流のモデル化による「帰国後の現実」の打破：派遣者自身も創り上げている側面はないでしょうか？(1)

- 自治体、教育事務所ごとに、試験や派遣中、派遣後の実態は異なる
- 帰国後、「遊んできたと言われるのがオチなので、聞かれても積極的には返答していない」「海外へ派遣されたということを、封印して学校で生きている」「他の派遣者に対するうわさ話で、あいつ日本人学校だって！ヤッター！というのを聞いて、何だか怖くなって、何も話していない」「全くやったことのない、日本語教室関連の分掌ばかりを務めるようになってしまった」などという声を聞くことがある。



→積極的な情報発信、継続的な研究

交流のモデル化による「帰国後の現実」の打破：派遣者自身も創り上げている側面はないでしょうか？(2)

- 積極的な先生方による「派遣国を知る地域の代表として見聞や現地校の視察内容を広める役割」以外の提案はあり得ないでしょうか？
- 派遣国の事情も刻々と変化するので、経験はすぐに古くなってしまふ。派遣国や派遣校につながり続ける役割はないだろうか？派遣国での実践研究から日本全体の教育実践を問うような役割はないだろうか？

→日本人学校派遣前に、研修等でエジプトにおける特別活動を介したEJSとCJSの交流を学ぶ意義



帰国教員の現場での新しい関係性

－「派遣国での実践パートナー」から、「派遣国での成果を生かして日本の教育実践をより高める共同実践者」という新しい帰国教師像の提案－

- 派遣国エジプトのカイロ日本人学校で、エジプト日本学校との授業研究会で公開授業を行った原（現メンバー）は、令和6年3月帰国後に岐阜県公立小学校教諭（4年生担任・学年主任、研修主任）
- 初のスーパーバイザーとしてエジプトへ派遣（令和2年～令和5年）された鈴木（現メンバー）は、令和5年3月帰国後に東京都多摩市立貝取小学校校長
- エジプトで実際にTokkatsuの普及に共同で務められた。
- 帰国後にはDチームメンバーとして、日本人学校と現地校（ここではエジプト日本学校）の授業（日本の教育課程）を通じた交流のモデル化で、再度協力、協働



- ・ これまでは、誰も行ったことのない外国へ数年住んだ経験のある先生、として文化の大使のような位置づけではなかったでしょうか。
- ・ 変化が激しい現在では、体験はすぐに古くなります。帰国後に「コンテンポラリーな事件に関するコメントを求められて困った」とい感想を聞きます。
- ・ 今や児童生徒の方が、国外旅行・居住体験が豊富です。



◆ 派遣国で、「現地校の教師とともによりよい授業づくりで協働する」交流モデルの魅力

◆ 「日本の教師であること」を視察から感じるにとどまらない、教育技術の比較、その背景にある教育理念への気づきは、協働あってこそではないか。

◆ 帰国後に「教師としてどのような力をつけていきたいか」「活躍の場として、派遣者間のどのような協働がありうるか」の青写真づくりとして、交流モデルは意義を発揮する。

特別活動は現地の人々の関心を呼び起こす

【ドイツ：フランクフルト日本人国際学校における運動会】

- 「静かにする時間帯」 平日：22時～翌朝7時まで / 13時～15時 土曜：19時～翌朝8時 →校庭でBGMを流したり応援したりしながらの学校行事の実施は考えられない
- 近所2000枚のチラシを配付して理解を求めるも、クレーム等
- 校門を開放して、綱引きに参加を呼び掛ける。ルールのわかりやすさもあり、毎年楽しみに参加する大人が年々増加。
- 小・中学部と補習校との共催。ドイツ人の感覚からは、平日に現地校へ通い、土曜に補習校に通うのはかなり勤勉。両親のどちらかがドイツ人の子どもは、強制されて通うが年1回の運動会を楽しみに通っている。
- クリスマス集会へボランティア参加する地域住民など、教育活動への関心と自ら交流を申し出る関係性の構築。